

# 1960年代のアメリカ現代舞踊 にみる他芸術の相互関連性

— ミニマリズムを中心に —

唐津 絵理

## 1. 研究目的及び方法

1960年代のアメリカにおける現代舞踊と美術、音楽という他芸術との関連に焦点をあて、ミニマリズムを中心に、関連芸術が舞踊にもたらした影響、及び他芸術と舞踊との関係を明らかにすることを目的とする。

第一に、各芸術相互間の交流や共同制作を調べることにより、音楽家、美術家が舞踊家にどのような影響を与え、また舞踊家自身は他の分野の芸術家とどのように関わっていったかを考察した後、第二に舞踊、音楽、美術でのミニマリズムの特徴を明らかにしていく。第三にミニマリズムの中に流れるいくつかの概念を抽出し、それをそれぞれの芸術がどのように作品として体現していったかを芸術間で比較、検討していくことにより、個々の芸術独自の性質をとらえ、舞踊の特質を明らかにする。

方法としては、以下の文献を中心に考察を進める。

### 主要文献一覧

- 1) Yvonne Rainer: Work 1961-73, (The Press of the Nova Scotia College of Art and Design and New York University 1974)
- 2) Sally Banes: Democracy's Body-Judson Dance Theater 1962-1964, (U・M・I Research Press 1980)
- 3) Margery, J, Turner: New Dance, (University of Pittsburgh Press 1980)
- 4) Sally Banes: Terpsichore in Sneakers, (Boston, Houghton Mifflin Company 1971)
- 5) 市川雅「アメリカン・ダンス・ナウ」(Parco 出版局 1975)
- 6) 市川雅「行為と肉体」(田畑書店 1972)
- 7) ローズリー・ゴールドバーグ, 中原佑介訳「パフォーマンス」(リプロポート 1982)
- 8) 千葉成夫「ミニマル・アート」(リプロポート 1975)
- 9) サム・ハンター, 東野芳明訳「現代絵画 22・今日のアメリカ絵画」(平凡社 1976)
- 10) 東野芳明「現代絵画 24・正界の中の現代絵画」(平凡社 1976)
- 11) ニコス・スタンゴス, 室木範義訳「20世紀美術」(Parco 出版局 1985)
- 12) ウィム・メルテン, 細川周平訳「ミニマル・ミュー

ージック」(冬樹社 1985)

- 13) ポール・グリフィス, 石田一志, 佐藤みどり共訳「現代音楽—1945年以後」(音楽の友社 1981)
- 14) ジョン・ケージ, ダニエル・シャルル, 青山マミ「小鳥たちのために」(青土社 1982)

## 2. 結果及び考察

### (1) 芸術間の相互関連性

1960年代から活動を始めたポスト・モダン・ダンサーのうち、中心的役割を果たしたと考えられるジャドソン・ダンス・グループを取り上げ、他芸術との交流やコラボレーションを、主要文献を中心にまとめた結果、図1のように表された。

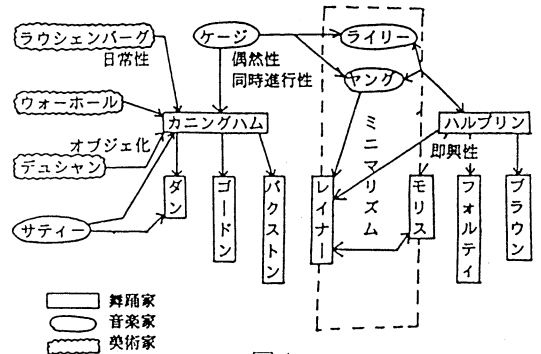


図1

ジャドソン・ダンス・グループのダンサーはカニングハム、アン・ハルプリンという二人の舞踊家から学んでいるものが多く、彼らの方法論はジョン・ケージの思想に通じていると考えられる。

### (2) ミニマリズムの形式上の特徴

主要文献一覧の1), 2)と4)~14)の文献から舞踊、音楽、彫刻それぞれのミニマリズムの主な特徴をあげ(図2参照), そのなかから芸術間の類似点を取り出し、ミニマリズムの様式上の共通の特徴を考察した結果、素材の単純化と形式の平坦化があげられた。

### (3) 芸術相互間の比較

(1)での芸術間の相互交流と、(2)でのミニマリズムのそれぞれの特徴を参考に、これらのミニマリズムの特徴の、根底にある概念を抽出した。その結果、これらの特徴から、オブジェ化、非目的性、即興性、日常性の4つの概念が抽出された。図2の傍線はそれぞれの特徴がどのような概念に基づいているかを示したものである。

#### ① オブジェ化

美術作品をオブジェ化することは、ただ「みる」という存在である故に美術の世界ではもっとも容易になされ得た。特に彫刻は、それ自身が三次元的なオブジェで、素材の中性的な工業用材を意味をもたないよう配列することでオブジェ化をさらに推し進めた。音楽では、ヤングが持続音を他

から切り離された一回限りの事象とみなすための方法として用いた。舞踊における素材は人間の身体であるが故に、人間そのものをオブジェとして扱おうとしていったと考えられる。人間の身体が意味をもたないよう個人を非人格化し、ものと同等に扱う、この空間上での素材の取り扱い方から考慮すると、舞踊は彫刻に近いと考えられる。

### ② 非目的性

これは自己の表現の否定を意味し、表現性を排除した作品はオブジェと化す。特に時間軸をもたない美術では、オブジェ化の場合と同じであると考えられる。時間的要素の強い音楽と舞踊では、目的をもたない作品は、非物語的で、クライマックスを欠いていることから、全体の構成が平担であるような配列を作るための手段として「反復」が用いられたと考えられる。さらに舞踊では、ダンサーでない人や日常の歩く、走るといった簡単な動きを用い、エネルギーの均等化を目指した。ここで純化したものをさらに明瞭なものとし、観客に提示できるよう、動きを強調し物化していくための方法として反復が用いられたと考えられる。

### ③ 即興性

ミニマリズムでの作品は、数学的緻密さをもっており、即興的な要素はあまりみられない。即興を用いる際は一定の基本単位の下で、繰り返す回数、曲の開始、終了の自由等の方法で行われた。これは個々を重んじるなかで、誰もが同じ強さを維持するよう注意されたため、ここで重要となるのは事柄がなされていくプロセスである、ということが推測できる。そしてそのプロセスを重視するために、より着実に時間を埋めていくことができる

タスクや単純な動きが選ばれたと考えられる。

### ④ 日常性

ミニマリズムでは日常性のあるものをそのままの形で使うのではなく、作品を平担で中立化するための手段として、見慣れた素材を使っている。舞踊においては、日常的な動きを断片的に使ったり、反復することで、日常的行為がもつ意味を解体させ、観客が行為を冷静にみることができるようになっていると考えられる。音楽では、ケージが音を観客の自由にとれるようにと意図しているのに対し、ヤングはひとつの音へと観客の注意を向けようとしている。以上のことより、時間の推移にしたがい、つまり基本単位の連続性に伴い、観客を異化していこうとしていたと考えられる。

## 3. まとめ

舞踊は時間的要素の強い音楽と、空間的要素の強い美術の両方の要素を持ち合わせており、そのため同じ概念であっても、他芸術よりもより様々な利用の仕方が可能であったと考えられる。そしてその利点のために、他芸術のアーティストが舞踊に関心をもち、相互交流を通して、互いに影響を与えあっていたと考えられる。

純粋化を目指したミニマリズムであったが、舞踊における素材である身体は、それ自体が生きた人間のドラマでもある。そこで、身体と精神を切り離して考えることはできなかったと考えられる。しかし、この舞踊の独自性のゆえに、同じミニマリズムという動向のなかでもより多くの試みが可能であったと推測される。

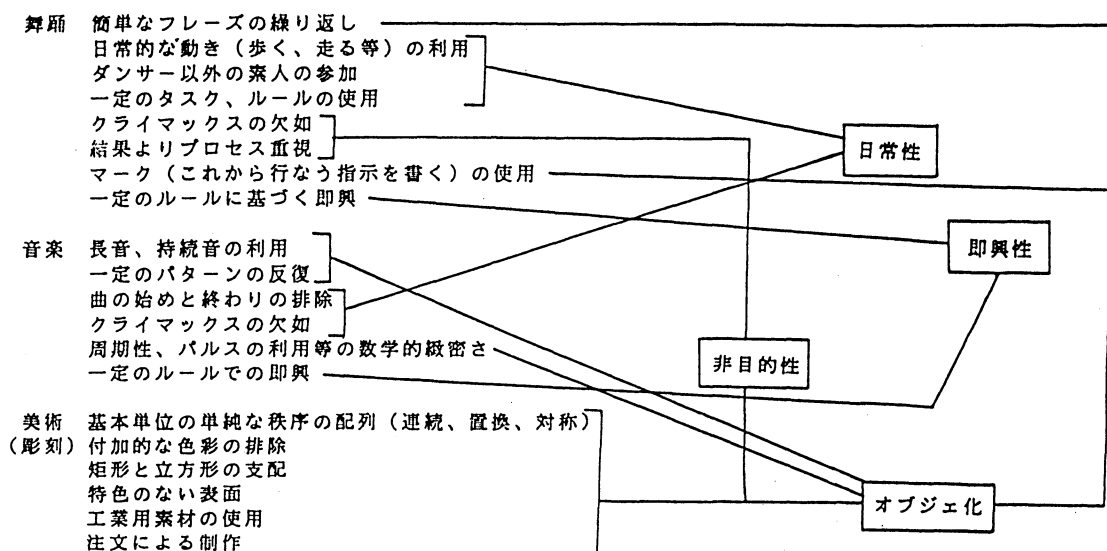


図2 ミニマリズムの特徴

著者作成